

奥野 総一郎 同志遂げた改革

抄遊交

「本当に選挙に出るのか」。総務官僚を辞めて千葉市長選へ立候補すると決めた際、真っ先に心配してくれたのが同期入省の竹村晃一君だった。落選すれば職を失う身を案しながらも「頑張れよ」と温かく背中を押してくれた。当選はかなわなかったが、その後も同期会を開いて激励してくれた。

竹村君は現在、総務省総括審議官を務める。平成元年（1989年）に郵政省に入った時からの付き合いだ。徹底して調査する緻密さに加えて酒席で交渉相手を取り込む一面もあり、硬軟織り交ぜた仕事ぶりが印象的だった。

そんな彼と郵政民営化につながる歴史的な改革に携われたのは幸運だった。それぞれ郵貯と簡保の中堅として財投改革法案作りを担った。私が郵政公社のプロジェクト室に移った後も郵政三事業の公社化法案作りで共に汗をかいた。深夜に財務省や内閣法制局に向き折衝することもあったが、常に冷静な竹村君に助けられたことは一度や二度ではない。公社化法が成立した後、互いをねぎらいながら酌み交わしたお酒の味は格別だった。

何事にも細かい目配りを欠かさない竹村君から学んだことは多い。国会議員となったいま、利害調整が求められる政治の現場で生かされている。（おくの・そういちろう＝衆院議員）